上高井教育会報

第240号
発行所
上高井教育会
発行人
上高井教育会理事長
梅本裕之
編集人
会報編集委員長
宮入勝彦
印刷所
須坂新聞社

共に学びあう上高井教育会

上高井教育会理事長　梅本裕之

明治十八年、五十八名の教員により発足した「上高井郡私立教育会」以来、上高井教育会は今年で百三十九年の歴史を刻んでいます。この間、多くの先輩の方々、地域の皆様、そしてPTAの皆様に支えられて今日の姿があります。この歴史と伝統、与えられた職責を深く胸に刻み、微力ながらも精一杯努めてまいります。皆様方のご支援とご協力を心よりお願いいたします。

百周年記念事業として発行された「上高井教育のあゆみ」には、現在の研究委員会の礎となった、昭和十二年の修身研究会の記録が残されています。当時の山崎会長は「立派な成案を得ることよりも、最上の研究経過を通るところに研究会の生命があると信じる」と述べ、経過を重んじる姿勢が記されています。この姿勢は、現在にも通じる「教員が議論を重ね、協働して学び続けることの重要性」を示唆しています。

少子化やテクノロジーの進展、グローバル化、自然災害の激甚化…。未来を予測することが困難な時代と言われる中、昨年6月に閣議決定された教育振興基本計画では、「持続可能な社会の創り手の育成」、「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」をコンセプトに掲げています。児童や家庭の多様化、不登校の問題などは、これまでの教育の限界を浮き彫りにしているのかもしれません。将来を担う子どもたちを育てるためには、教育も大きく変革していく必要があります。私たちは、社会の変化に適応しながら学び続け、成長して、教育の使命を果たしていきましょう。

限られた時間の中で学び続けることは容易ではありませんが、互いに研鑽し、支えあう仲間がいれば、高めあいながら前進していくことができます。研究委員会は本教育会の職能向上事業の一環であり、学校の垣根を超えた学びの場でもあります。今年度も、長野短期大学の畔上一康先生を講師にお迎えし、「子どもと共に創る授業～子どもの学び　教師の学び～」をテーマに、職能向上を目指しています。畔上先生は講演で、「子どもと創る授業とは、子どもの内なるものを紡ぎ、削り出していく授業である」と話されました。すべての教室で、子どもが主役の、子どもたちが生き生きと探究的に学び、力を伸ばしていく授業を追い求めていきましょう。

同好の仲間が集い、教員としての専門性を高め、日々の生活を豊かにする同好会もまた、新たな仲間と共に学びあう貴重な研修の場です。夏休みには、夏期講座として講習、講演、巡検などが集中して計画されています。

夏期講演会には、二〇一六年リオデジャネイロ五輪、女子二百メートル平泳ぎ金メダリストの金藤理絵氏による「這い上がる力」の講演も予定しています。その貴重なご経験から、挫折や苦悩を克服し夢を実現する姿勢について学ぶことができるものと思います。

上高井教育会では、仲間と情報交換をしながら実践に学び、子どもたちの学びと成長に貢献することを目指し、各事業を推進しています。私たち教員も、子どもたちと共に成長する喜びを実感できる上高井教育会を、皆様と共に築いていきたいと願っています。今後ともご支援をよろしくお願いいたします。

（豊丘小）

教育会だより

4・1　各校にて代議員及び信教代議員選挙
2　第一回総会　○新役員の承認
第一回理事会
第二回理事会　会計監査
10　研究世長会①
15　教研三団体代表者会①　教研推進委員会①
12　第二回定時社員総会
18　○令和五年度事業報告及び決算承認
○令和六年度事業計画及び予算承認
22　教研推進委員会②
26　教研学校代表者会①
5・1　教育会総集会（於：常盤中）
中心講師講演会　講師　畔上一康　先生
（長野短期大学 学長）
演題　「人間的営みとしての学び」
※研究総委員会・同好会　世長会
20　教研推進委員会③
21　新任者教育懇談会・歓迎会（兼　信州教師塾B）
28　同好会②
第三回理事会
6・4　30　研究推進委員会②
教研推進委員会④
7　第三回総会
11　教研分科会　会長司会者打合会
14　研究推進委員会③
18　同好会③
28　教研推進委員会⑤（中間連絡会）
7・2　6　信濃教育会総集会北安曇大会
12　研究委員長会②　中心講師ご指導
教研推進委員会⑥
22　上高井教育会報第240号発行
25　教育会夏期講演会・会員発表（メセナホール）
8・1～2　同好会夏期講座①～②　同好会④
19　教研推進委員会⑦　教研学校代表者会②
30　研究推進委員会④（兼　信州教師塾B）
27　同好会⑤
9・4　第四回理事会
6　教研推進委員会⑧　教研分科会長会
7　上高井教育研究集会
（須坂小・仁礼小・墨坂中・相森中）

一年生と過ごして感じたこと

小池哲平

私は今年度初めて一年生の担任になりました。入学式当日、今日から始まる学校生活にワクワクしている表情の子やドキドキしている表情の子など様々な表情をした子どもたちを目の前にして、私自身楽しみな気持ちと正直不安な気持ちがありました。しかし、いざ授業が始まると、何もかもが初めて尽くしであるにも関わらず「やってみたい！」「できるようになりたい！」という、やる気が子どもたちから伝わってきました。例えば「ひらがな」の学習では、お手本の字のように書こうとまだ慣れない鉛筆と消しゴムを使い、何度も何度も書き直しをしながら、とても真剣な表情で取り組んでいます。算数の問題が解けたときや自分一人で何かできるようになったときは、とびきりの笑顔になり、嬉しい気持ちが表情から伝わってきます。

四月から約三ヶ月が経った今、このような子どもたちの表情をよく見て伝わってくる思いを大切にしていきたいです。一年生は良くも悪くもとても素直です。思ったことがすぐ表情に出る子たちばかりです。その子たちの思いを表情から読み取り、少しでも「できた！」という達成感や満足感を持てるようサポートしていきたいです。そして、子どもたちが笑顔になる瞬間を増やしていきたいです。そのためにもまずは私自身が子どもたちの前で常に笑顔でいたいと思います。

（栗ガ丘小）

清涼談義

潤身の森の妖精

日滝小児童作品
「児童が考えた児童会のキャラクター」

イモムシ

上野浩成

ここ何年か私の教室にはイモムシがいる。しかし、多くの子どもたちはあまり食いつかない。大体いつも「何飼ってるの？」「イモムシ」「キモっ」というやりとりで終わる。そんな季節が今年もやってきた。

小山小学校の理科室の前に大きなカラスザンショウの木が生えている。数年前の五月のある日、葉っぱの上で、鳥のフンのようなモノを発見した。それはアゲハチョウ（ナミアゲハ）の幼虫だった。さっそく教室に連れ帰り飼い始めた。しかし、成長するにつれ、どもナミアゲハとは違うようだった。そしてある日の朝、教室に入ると目にパッと鮮やかな深緑色が飛び込んできた。そこには羽化したばかりの「ミヤマカラスアゲハ」がいたのだった。カラスといっても黒くなくて、光を受けると濃緑色に輝いた。その美しさに本当に感動を覚えた。なぜ葉っぱを食べるだけであんなにも鮮やかな色が出てくるのだろうと、生命の神秘を感じた。そんな気持ちを、子どもたちと共有したいと、イモムシのカワイさやチョウの美しさを熱く語っても割と空回って終わることが多いのがちょっと残念だったりする。でも、今年も私はイモムシをさがす。

（小山小）

熱中する子どもたち

里井翔太

この四月、私は墨坂中学校に赴任して、二年二組の担任だと伝えられた。これまで講師としての経験は数年あったが、担任を任されるのは初めてのことで、不安と期待が半々だった。子どもたちが登校してくる日を「早くこないかな」と思う半面、「いやいや、もう少し準備の時間が欲しいぞ」と思い返し、あわただしく過ごしたのも今では懐かしい思い出だ。

そして、実際に子どもたちが登校してくるようになって、いきなり衝撃を受けた。それは、四月の一週目、新しいクラスの親睦を深めるため、子どもたちの発案でフルーツバスケットを行ったときのことだ。楽しそうにフルーツバスケットをしている様子を見ながらそろそろ、「飽きたー」とか「他のゲームしようぜ」って言いだす子が出て来るかなと心配していた。しかし、そんなことを言い出す子は一人もおらず、気が付けば、授業の終わりを告げるチャイムがなっていた。そのとき、子どもたちから出てきた言葉は、「もう五〇分たったの？」だった。

二年二組の子どもたちの、興味があるものへの熱中する力は相当なものだ。この熱中する力を二学期の職場体験学習や生徒会引継ぎ、そして普段の生活場面でも発揮できるようにサポートしていきたいと考えている。

（墨坂中）

編集後記

令和六年度会報二四〇号を発行し、無事お届けすることができました。ご多用のところ、原稿をお寄せいただきました会員の皆様に、心より感謝申し上げます。

今号の記事に、桐の花という言葉が出てきました。井上小学校の校章になっているという「桐の花」はどんな花なのだろうと思い、検索してみました。すると、桐の花には「高尚」という花言葉があり、「人々に幸福と繁栄をもたらす象徴」にもなっているとのことでした。それからというもの、井上小学校の前を通るたびに、頭の中に「高尚・幸福・繁栄」のイメージが浮かぶようになりました。なんだか素敵な気分になりました。

会員の皆様からのご意見やご感想をいただきながら、より親しみをもって読んでいただける会報を目指して参ります。

（馬場）

委員長　宮入勝彦（常盤中）
副委員長　加藤敦子（小布施中）
事務局　市川麻衣子（高山小）
委員　徳武育（日野小）
小林誠（小布施中）
馬場ゆみか（墨坂中）
今田晴美（高山中）
藤澤隆之（豊丘小）

よりよい授業を目指して

研究委員会会長　松本孝志

「子どもたちのために、もっといい授業をつくりたい」そう願って、今年度も十三の研究委員会が発足しました。本会は、上高井教育会の職能研修事業の一つであり、教員である私たちが、子どもたちに資質・能力を育むための授業改善を学ぶ大切な研修の場となっています。

本年度は長野短期大学学長の畔上一康先生を中心講師としてお願いする最終年となります。全体研究テーマ「子どもと共に創る授業～子どもの学び　教師の学び～」についても、まとめの年となります。それぞれの研究委員会が、この研究テーマの具現に少しでも迫れるよう推進委員会を中心に実践を積み重ねていただけたらと思います。

八月二十七日には、豊洲小学校を会場に、信州教師塾Bが計画されています。教科は体育ではありますが、畔上先生や体育研究委員会と共に学び合う貴重な機会かと思います。ぜひ多くの先生方のご参加をお待ちしております。

ここ数年は、個別最適な学びや協働的な学びなど、私たちの教育観、授業観の転換が求められています。一方で、学級数、職員数の減少で、校内で学び合うことが厳しい状況も生まれています。校種や学校の壁を越えて集う研究委員会は、これらの課題を克服する場にもなりうると考えています。自分の経験や悩みを本音で語り合い、子どもの姿から学び合う機会としていただけたらと考えています。

（森上小）

「好き」が「同じ」仲間とともに

同好会会長　神田和幸

同好会運営基本方針一には、「同好会は、教育会員を中心に同好の者が集まって、教職員としての職能向上を図ることを目的とする」と記されています。

職能向上を図る場はいろいろとありますが、同好会は字のごとく、同好の者が集まる場なので、親しみやすさを感じ、気軽に語り合えるまでに、さほど時間を要しないのではないでしょうか。

私も新卒以来、行く先々の郡市で同好会に加入をしておりました。はじめは先輩の先生のお誘いで、わけが分からずついていったのですが、時には熱く時にはみんなで大笑いしながら語り合う同好会のメンバーの先生方を見て、また次も来てみたいと思ったことを覚えています。それ以降同好会では、自分よりも造詣が深い先生に教えていただき目から鱗が落ちたり、「〇〇の取材してきたんですけど…」と若い先生のバイタリティーに刺激をもらったりと、今までの自分を更新するためには欠かせない場となっています。

上高井同好会は、教育会の会員以外や地域の方にも門戸を開き、積極的に参加をいただいておりますので、多くのつながりの中で自分の世界を広げていくことができます。まだ会員でない方は、ぜひご加入いただき、仲間とともに語り合いながら自分を更新していきましょう。

（高山小）

地歴同好会

地歴同好会長　中島洋一

「先生。ここ銭〇〇に出てくる道みたい。」「家と家がつながっているよ。おもしろい！」先日、社会科の時間に三年生の子どもたちと学校の周りを歩いて調べる中でそんな言葉が出てきました。

「おもしろい！」という感覚。自分も昨年度の夏期巡検の中で同じ思いをもちました。かつて製糸業で栄えた須坂の町並みを実際に歩く中で土蔵造りを基本に民家同士がつながっていると、奥に向かって長い敷地の家が多いことなど蔵のまちならではの特徴を発見しました。同時に今まで見えなかったものが歩く中で見えてくるおもしろさを実感しました。まさにフィールドワークの醍醐味です。

そのフィールドワークを通して地理歴史のおもしろさを学ぶことを長年大事にしてきた地歴同好会。これまでその土地や歴史的建造物・人物に詳しい講師の方々に多くのことを学ばせていただきました。

今年度はコロナ禍でできなかったバス巡検を予定しています。ちなみに目的地はかつて巡検で訪れた岡谷市です。須坂と同じ製糸業で栄えた岡谷の町並みを多くの先生方と一緒に歩けたらと思います。ぜひご参加ください。

（小山小）

英語同好会の紹介

英語同好会長　久保田英子

英語の授業だけにとらわれず、同好会ならではの楽しみを見つけるべく、英語同好会が発足して何年経つでしょうか。この間、多くの先生方のお知恵で、国際的な視野に立った様々な活動や人と出会う機会を作っていただきました。

オーストラリアでの留学を経てワイナリーを立ち上げた方や多くの外国人を受け入れるゲストハウスのオーナーの方との出会い、韓国のおいしいおやつの作り方を教えてもらったことも。日本を知るという逆の視点からお茶のお作法を学びつつおいしいお菓子をいただいたこともありました。

他にも大学の先生から欧米の音楽や文学について学ぶ機会や英語の授業のアイデアをいただいく機会を得るなど、多方面からの研修をさせていただいています。

普段学校の中にいて、仕事に追われる日々を過ごしていますが、こうした様々な出会いがあることで、学校という狭い世界から、自分自身がずっと興味や憧れを持っていた広大な世界に少し足を踏み入れられたような気がしています。同じように興味や関心を持たれた方がいらっしゃいましたらぜひご一緒しませんか。

（小布施中）

本校の宝 82

井上小学校

私たちの心根を支える「心礎」

井上小校歌碑

井上小校章

平成五年（一九九三年）発行の『井上小学校百二十周年記念誌』（以下、『同誌』）の「井上小学校・校章と校歌」によると、本校の校歌は昭和三十八年（一九六三年）に作られたとある。同年、管理校舎落成記念の際に校章が制定されており、校歌も時を同じくして制定されたものと思われる。因みに本校の校章は、桐の紋章の中央に「井上」の文字を配したデザインである。桐の花が採用された由来は、謡曲「柏崎」の一節「桐の花咲く井上の、山を東に見なして」に因んだものと同誌にある。当時の校区には、桐の花が美しく咲き誇る風景が彼方此方に見られたのであろう。また、校歌の二番にも桐の花が登場する。

ある高学年児童は、歌詞のよさを、「北信五岳や千曲川など、井上地域の豊かな自然が思い浮かぶような言葉が沢山入っていて、自分の住む地域に自信を持って歌えるところ」だと述べている。またこの児童は、好きな歌詞に「希望あふれて花咲き実る」を挙げ、理由を「咲き乱れる花のように希望が溢れる人生を、切り開いていこうと感じられる所がいい」と述べている。

現在の学校教育目標は、

『明日の日本の力が育つ』

一、よく考えてやりぬく誇　「やりぬく」

二、いつも胸には進取の気象　「もとめる」

三、なごやかに手をつなぎ　「つなぐ」

であり、これらは校歌の歌詞からの引用である。先に述べた児童の言葉からも分かるように、校歌は誕生から六十年を経た今尚、我々教職員や児童らの心根を支える心礎であり続けている。

（越野智夫）

ＱＲコードで校歌が聞けます

本校の中核活動

中学生議会を通して

高山中学校

昨年度、高山中学校の中学生議会は四年ぶりに高山中学校体育館で開催することができました。三年生は初めての経験でしたので、まず議会を知るべく、六月に本物の村議会を見せていただき「しっかり議論されていて、村民として安心した。だから、自分たちも村のために協力したい」という思いをもち、十月の中学生議会に臨みました。

高山中学校の中学生議会は、「総合的な学習の時間」を中心に、「故郷（ふるさと）高山村」をテーマとして三年間取り組んできた学習をもとに、村長や議員に自分たちの考えを直接提言、質問する場です。

当日は一、二年生には傍聴人として参加してもらいました。答弁は村長をはじめ各課長など、大人が真剣に行ってくださいました。三年生は、大きな五つの柱『①観光　②高齢者福祉　③人口　④お神楽　⑤特産物のＰＲ』について、これまで調べたことに基づいて提言や質問を行いました。お神楽の生徒は、「二年生の時に講師の方から、継承する人の減少が課題と聞いたことがきっかけで、私は地域のお神楽に入り、今もそこが自分の大事な居場所となっている。だから村民同士のコミュニティーが活発になるように更なる支援をお願いしたい」という熱い提言を行っていました。

生徒たちは答弁を聞き、村の大人が幅広い視点からメリットデメリットを考えて答えてくださったことや、自分たちが提言することで村が変わっていくことなどを実感できた時間になったようです。

（原田奈実）